

大磯町西小磯海岸の“石切り場”跡の探究

たぐち きみのり
田口 公則(学芸員)

2019年秋の台風で、西湘海岸では浜をつくる砂礫が流失し、ふだん見ることが難しい岩盤が露出しました。台風通過後に私が注目したのは大磯町の西小磯海岸です。台風の度に岩盤が露出することが知られているからです(平田ほか, 2002)。岩盤が広がった現場に、久しぶりに出現したのが今回取り上げる“石切り場”跡(図1)です。

実は、この“跡”については、石切り場跡なのかさえも不明で、わからないことばかりなのです。このような「わからない」が自分に多様な「知りたい」という気持ちを生み出します。本稿では、この多様な「知りたい」を背景に含めながら“石切り場”跡の探究の進捗を紹介します。

西小磯海岸、謎の遺構との出会い

大磯町の西小磯、旧吉田茂邸から西湘バイパスを越えると砂礫浜が広がっています。砂礫の下から現れる岩盤が大磯層と呼ばれている地層です。私にとっては、地層や化石の観察地としていつも訪れているフィールドのひとつです。

20年ほど前のこと、観察会の下見のために、同僚の大島学芸員と西小磯に足を運びました。葛川(不動川)河口から浜へ出てみると、いつもの光景が一変し、海岸の砂礫が流失していました。足下の砂礫が流出したことで、頭上に消波ブロックを見上げたほどです。岩場を上り降りしながら、こんなに地層が露出することもあるのか、と感心していると、つぎに見えてきたのが岩盤に造られたいくつもの大きな四角い穴です。何らかの遺構に違いなく、思わず「何かの遺跡なの？」と声にしたほどです。さらには、4ヶ所に配置した丸穴を見ては、何か杭の跡かと思い「海の家でも

あったの？」ともつぶやいてしまいました。当時、私は石材や石切り場の知識を全く持っていませんでしたので、目の前の遺構を勝手な解釈で想像するだけでした。しかし、それは「何かすごい謎の遺跡」と強印象を受ける機会となったのです。

探究のはじまり:四角い跡は、何の遺構？

詳しいことを知っていそうな人に謎の四角い穴について聞き取りをすすめました。

まずは、博物館の先輩学芸員いわく、「生け簀だよ。三浦半島でも多数見られるよ」とのこと。「生け簀」説です。森(2007)は「生け簀が現れた」と記しています。しかし、この穴には水が貯まるので生け簀にもなりそうです。しかし、四角い穴が棚田状に段々になっている様子や、丸穴の跡を見てしまうと、単なる生け簀とも思えないというのが私の考えでした。また、森・野崎(2015)では、「いつ、何の目的で作られたものか不明」とあります。

さらなる聞き取りで地元から得た情報で、「塩田」でした。かつて、西小磯では塩づくりの塩田が存在したとのこと。四角い穴は塩田設備の名残という説です。

ここまで「海の家」説、「生け簀」説、「塩田」説が挙がりました。つぎに、「石切り場」説へと迫ってみましょう。

地域の石材への興味の深まり

地域の地質を紹介する上で、地域資源である地元石材に注目することが役に立ちます。身近な素材だけに興味・関心を高めてもらえるほか、多視点で思考する機会となるからです。これまで、厚木市の七沢石、秦野市の戸川砥、小田原市の久野石などに注目してきました。さらに、神奈川県立歴史博物館と共催した特別展

「石展」「石展2」に関わったことで、私にも石材に関する知識が増えていきました。その過程で西小磯の四角い穴についての認識が変わっていきました。

まず、あの四角い穴は、地元ではシンドーサキ石(中丸石)と呼ぶ石を切り出した跡(笠間, 2003; 2006)と知りました。「石切り場」説の登場です。笠間さんが紹介する石垣をいくつか確認したところ、貝化石が含まれるなどしか大磯層の石を用いていると納得しました(図2)。また、添田(1997)は、明治中頃に石切層を見つけ採掘を試みた川尻(葛川河口付近)の石切り場を紹介しています。

大磯町には、もうひとつの地元石材があります。「高麗石(高麗寺の石)」です(笠間, 2003)。大磯の街の北側にある急峻な高麗山をつくる岩石(高麗山層群)で、街の石垣に使われています。そのひとつが大磯駅前のエリザベス・サンダースホーム(旧岩崎邸)の石垣です(大磯町, 1997)。高橋(1991)には、高麗石が明治以前から土台石として使われ、明治中頃の別荘地開発に伴い石垣に使われたとともに、割栗石(基礎工事で地盤に敷き詰める石材)として需要があったとあります。

西小磯海岸に近い旧吉田邸の石垣を確認したところ、やはり高麗石が使われていました。さらには、この石垣の天(上)端部分の切石(笠間と呼びます)には大磯層の石が使われています(図3)。この石垣は、まさに大磯地元石材「高麗石」と「シンドーサキ石」の競演といえるでしょう。

四角い穴を俯瞰する

冒頭に紹介したように2019年秋の台風の影響により、再び四角い穴が大規模に出現しました。



図1. 海岸に残る遺構。2019年10月14日撮影。



図2. 大磯のシンドーサキ石を用いた石垣。



図3. 旧吉田茂邸に見られる石垣。上部がシンドーサキ石、下部が高麗石。

今回、四角い穴を“石切り場”跡と確認した理由のひとつが、現場に石切り途中と思える状況があったことです(図4)。溝切り法(ツルを用いて溝を掘る)による石切りの様子に見えます。

台風通過後、すぐに現場の状況を撮影したものが図1です。さらに翌々日、より広範囲を写真におさめるべくスペシャル撮影(5.5 mの棒の先にカメラを付けて撮影)を行いました。その写真をもとに、3Dモデルを構築しました。斜め写真のため、凸凹の影になる部分は欠如していますが、簡易平面図としてなら有用です(図5)。数十mに渡る範囲の俯瞰により“石切り場”跡の具体的な広がりが見えてきました。

いつどのように切り出していたのか

西小磯海岸の四角い穴は、どうやら石切り場の跡と睨んでよさそうです。つぎなる「知りたい」は、切り出した時代はいつかという疑問です。上述のように川尻の石は明治中頃に切り出そうとしたことがわかりました。川尻も、広義のシンドーサキ石と考えてもよいかもしれません。また、いくつかの石垣において高麗石とシンドーサキの石がセットで使われている状況は、やはり明治期での切り出しを期待させます。

大磯の海岸であるこの場所にて、石を切り出した時期を考えるときに重要な要素が1923年(大正12年)の関東大地震です。その前なのか後なのかで状況が大きく変わるからです。地震による大地が隆起した分の約1.7 mを差し引いて考えることが必要となります。

西小磯海岸に露出する四角い穴は、高い場所で約2.5 m、低い場所は砂に埋もれて不明です。明治期での採石なら、現在より1.7 m低い場所は状況によっては海面すれすれという状況にもなります。この点については、たまたま海面に近い手近なところに石材に使える岩が露出していた

から採石したという考え方もできます。あるいは、潮の干満の利用を考えて海面に近い所を選択したという見方、すなわち干潮時に切り出し作業を行い、満潮時に海に浸かったらその浮力を用いて石材を積み上げたという見方も可能です。

このように、“石切り場”跡についてはつぎつぎと想像が広がりますが、これらの真実は当時の記録に頼るほかありません。郷土誌などに関連の記述がないか、地元に詳しい情報はないか、今後の文献調査やインタビュー調査に期待するところです。

3つの「知りたい」

西小磯の“石切り場”跡での探究を通じて、おぼろげながら「知りたい」が3つ見えてきました。探究を支える重要な要素ではないかと感じているものです。

1つめは「感動」です。私の場合、謎の遺構との出会いには驚きという感動がありました。まささらな状態でスゴイものに遭遇したときなど、その感動にともなう「知りたい」の存在です。

2つめは「調査によって深まる興味」です。知れば知るほど、調べれば調べるほど、物事が見えてきて、つぎなる「知りたい」が生まれてくる状況です。

3つめは「領域をつなぐ」ことで生まれる「知りたい」です。私のバックグラウンドは地質学と古生物学です。しかし、石切り場跡の事柄は、たとえば民俗学や考古学、歴史学の領域の扱いとなるのが常でしょう。大胆に見方を広げてみると、「石切り場の跡は、人という生物の営みの痕跡であり、ある意味で生痕化石」と考えることができます。生痕化石とは、たとえば「足跡の化石」です。大抵は体化石が伴わず、化石の主はわからないという状況となります。そのため、生痕化石の仕事は、地層に残された生物の痕跡から、その作られた状況や活動に生態を読み解こうという

挑戦となります。その際、ベースとなる学問領域が地層を見る地質学と生物の行動を見る生物学といえるでしょう。ここには複数の領域にまたがる仕事、越境による面白さがありそうです。この視点を石切り場跡にあてはめてみると、地質学、古生物学、歴史学、文化史、地理学、民俗学、郷土史学等々にまたがるその先に、なにか新たな面白さがあるのではないかと思うのです。

西小磯海岸の謎の遺構を例に、私の探究活動を綴ってみました。「すぐに結果がでなくとも、体験を頭の隅であたためておけば、何かの機会に再び動き出す」というスパンの長い探究の事例といえましょう。また、探究とは、「自分の体験が徐々につながっていくこと」とも言い換えることができそうです。つながって動き出すことが嬉しいことであると再認識しました。まだまだ“石切り場”跡の探究が続いていることをお伝えして筆をおくことにしましょう。

参考文献

- 大磯町 編, 1997. 大磯の民俗 (1)ー大磯・東町・高麗地区ー: 大磯町史民俗調査報告書 4, 246 pp. 大磯町.
- 笠間友博, 2003. 大磯の石材. 神奈川の自然をたずねて編集委員会編, 日曜の地学20 神奈川の自然をたずねて, p. 141. 築地書館, 東京.
- 笠間友博, 2006. 大磯町の地形・地質散策. 大磯町史研究, (13), 61-78.
- 添田喜一, 1997. 中丸(余綾)の史跡めぐり. 28 pp. 自家版.
- 高橋 光, 1991. ふるさと大磯探訪. 352 pp. 郷土史研究会.
- 平田大二・田口公則・山下浩之, 2002. 2001年台風15号の影響により露出した西小磯海岸の大露頭. 神奈川自然誌資料, (23), 63-64.
- 森 慎一, 2007. 大磯町西小磯海岸に露出した大磯層の層序と構造. 自然と文化, (30), 21-39.
- 森 慎一・野崎 篤 (2015) 秋期特別展展示解説書 後世に残したい相模川流域の地球遺産ー相模川をジオパークにー. 65pp. 平塚市博物館.

本稿の準備にあたり、JSPS 科研費(JP17H02008, JP18K01111, JP18K01112)を使用しました。



図4. 遺構に見られる溝切りの跡(スケールは1 m).

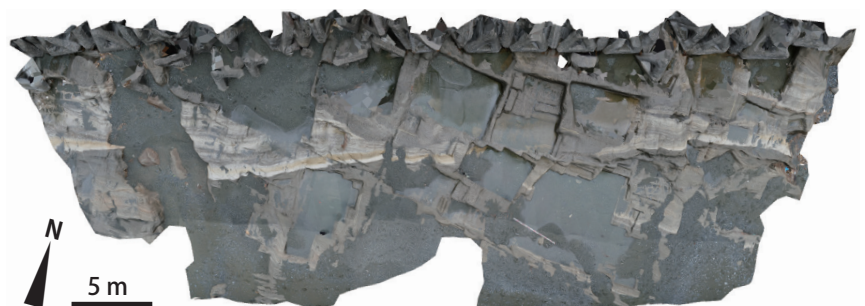


図5. 石切り場跡(簡易写真平面図). 2019年10月16日撮影.